



村野四郎詩集

楠本憲吉編

白 凰 社

青春の詩集 ⑰

村野四郎詩集

© 1967

昭和42年5月25日 第1刷発行

¥400.

著作者	むら 村	の 野	し 四	ろう 郎
編者	くす 楠	もと 本	けん 憲	きち 吉
発行者	高	橋	謙	

発行所 株式会社 白 凰 社

東京都千代田区神田神保町1-20

振替口座番号・東京92241番

電話・東京(03)291-7571・8365番

落丁・乱丁本はお取り替えます。 大文堂印刷／和田製本

村野四郎詩集

楠本憲吉編

村野四郎詩集

楠本憲吉編



青春の詩集 ⑪

白鳳社

目次

靈魂の朝

三

『畏』

三

旗

四

提議

五

蝶と詩人

六

鳥の巢

七

動物園

六

劇場

九

独身散策

二〇

書籍屋町通り

三

昆虫採集箱

三

宗教

三

四月の風

四

『体操詩集』

五

体操

六

鉄亜鈴

七

鉄鎚投

七

鉄棒

六

鉄棒

六

吊環

元

高障害

元

鞦韆

三

『珊瑚の鞭』

春の火

蜀葵

秋

秋

秋の恋

冬の終り

予感

花々の中で

春の時間

暮春抒情

山嶽にて

山嶽にて

雲のアルバム

秋の日

勉強の果

月

日の終り

齒

齒

齒

齒

齒

齒

齒

齒

齒

齒

齒

齒

齒

齒

齒

齒

齒

齒

齒

齒

隙間

ピアノ三重奏

鵲の巢

秋の影

夏の午後

登攀

少年

秋の椅子

白い山

故園悲調

『予感』

冬深む

幻の田園

展開

明るい秋

詩法

夏野

昏れる田園

毛

毛

毛

毛

毛

毛

毛

毛

毛

毛

毛

毛

毛

毛

毛

毛

毛

毛

毛

毛

青い石

熱い歌

夜あらし

新年

春の祭

暮春抒情

蕁麻の都

『実在の岸辺』

魚における虚無

花を持った人

歌

古い村

乞食

わが降誕節

ある時代の午前

秋の犬

苦い論理

経験

天路歷程

現代の冬

肉体

黒い歌

写生について

枯草のなかで

顔について

あざみ

詩法について

春の漂流

午後

肖像

有限の海

秋の章

魚

秋

蕭々

恢復期

二七

二七

二九

三〇

三三

三三

三四

三四

三三

三六

三六

三六

三三

三三

三四

三四

三五

三五

『抽象の城』

無神論

抽象の城

自殺考

崖の上の抒情

牛

さんたんたる鯨鯨

訪墓記

夜の内臓

人類の発達

すてられたブロンズ

過失

『亡羊記』

詩人の彫像

塀のむこう

永遠的な黄昏

一七

夜の運河
青春の魚
鹿

一六

変な界限

一五

秋の日

一四

秋のトルソ

一三

盲導犬

一二

肉屋のオルフェ

一一

橋

一〇

小さな文明

〇九

アニミストの歌

〇八

眺望

〇七

芭蕉のモチーフ

〇六

小さな詩

〇五

骸骨について

〇四

モナリザ

〇三

暗い雨のなかで

〇二

市街の馬

〇一

あの人

〇〇

死

一七

一六

一五

一四

一三

一二

一一

一〇

〇九

〇八

〇七

〇六

〇五

〇四

〇三

〇二

〇一

〇〇

〇〇

『蒼白な紀行』	一七
不眠の夜	一七
わるい界限	一七
人工衛星の夜に	一七
冬庭	一七
眠りの前の祈り	一七
葦	一七
夏の顛末	一七
小鳥の空	一七
夜のフラスコ	一七
一月の歌	一七
暗い春	一七
暗い春	一七
美しい四月	一七
秋の化石	一七
歳末記	一七
日常の犬	一七
秋	一七

同席	一七
郵便局界限	一七
湖畔	一七
蒼白な紀行	一七
冬	一七
見ばえのしない犬	一七
城	一七
秋の日	一七
村野四郎の人と作品	一七
鑑賞ノート	一七
年譜	一七
索引	一七

同席	一七
郵便局界限	一七
湖畔	一七
蒼白な紀行	一七
冬	一七
見ばえのしない犬	一七
城	一七
秋の日	一七
村野四郎の人と作品	一七
鑑賞ノート	一七
年譜	一七
索引	一七

村野四郎詩集

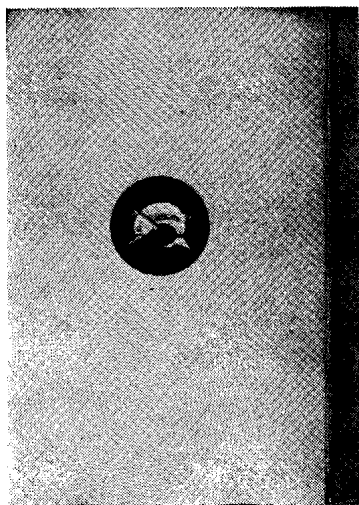
靈魂の朝

——「靈魂を食べて ふとるのよ」
というこえが どこかでしたので
急に胸がわるくなつて目がさめた

厨房ちゅうぼうの扉とびらがあいていた
母親が瘡やせた息子むすこに もういちど
——「ベーコンを食べて ふとるのよ」
と言っているところであつた

まこと肉と靈のんだら模様の春だ
ユスラウメが咲いている

畏



旗

わるい病患が僕の額をつめたくし

僕の胃袋に何んにも無くなって死んで了ったら

せめて友達、たくさんの紙の旗で葬列を賑わせてくれ

僕の古い詩稿でつづった旗で――

其奴を後で、骨が埋けられた墓土へ立てておけば

吹きっさらしのくらい夜風の中で

夜どおし其奴は、大声でわめき立てるだらう――

提議

友だち

僕が死んだら 墓のまわりにダリアでも植えてくれ
僕の腐肉がたくましくその茎を肥らせ

大輪の花をさかすのを僕は信ずる

だが君がそれを折り取り 胸の扣鈕にさして
一夜の夜会に萎れさせても

僕は悔みはしない――